

さざんか

第57号、2006年5月

風の薫りはやさしくなり、新緑が目には沁みるように輝く伊佐地方の5月は1年でいちばんさわやかな季節のような気がします。比較的好天に恵まれた今年のゴールデンウィークでした。楽しい思い出が出来たでしょうか。さて、当院では4月に院長交代がありました。ところ変われば品変わる。人変われば病院変わる、ということでもないでしょうが、同時にスタートした地方公営企業法の全部適用、まあ要するにこれまでのおんぶに抱っこの経営から独立採算制への移行、となり否が応でも病院は変わっていかないと生きていけなくなっています。効率一辺倒だけではとても十分な質の高い医療は提供できませんが、それでも効率に重点を置いてやっていかなければ経営が成り立っていかないという厳しい環境です。もっとも、以前から公共性と経済性の両立が公立病院に与えられた宿命ですので、日々良質の医療を追求していくことに変わりはありません。地域から求められる限り、地域のための病院としてさらに地域に貢献できるよう全力を尽くしたいと思っております。皆様の応援・ご支援をこれまで同様よろしくお願いいたします。

県立北薩病院の基本方針

- 1 患者さんの満足、ご家族の安心を提供します
- 2 急性期医療の実践と、より高い専門医療を追求します
- 3 地域の医療、福祉との連携を強め、これを支援します
- 4 仕事を通して喜びと生き甲斐を追求します

平成 18 年 4 月に院長職を拝命致しました。野村紘一郎先生の定年退職を受けてのことです。“さざんか”の編集局長として原稿依頼をしてきた身としては、院長就任の挨拶の原稿依頼を自らにするのもなんか妙な感じではありましたが、とりあえず院長就任のご挨拶と今後の抱負を述べさせていただきたいと思います。

ご存知のように、あるいは意外にご存知でない方も多いかも知れませんが、北薩病院を含む県立 5 病院は今年の 4 月から県の直営を離れて、独立採算制へと移行いたしました。（正確には地方公営企業法の全部適用になったということですが、理解としては独立採算制の方が分かりやすそうです）。なにごとにも良い点と悪い点があるのは当然です。誰にとって良いか悪いかでまた話は異なってくるのですが、ここでは病院の立場から独立採算制の良い点と悪い点についてすこし述べてみたいと思います。まず何故独立採算制にしたかという、これは間違いなく経営上の問題、もっとはっきりした言い方でいうと赤字問題です。

世の中の多くの自治体病院の例に漏れず、県立病院も経営上の困難と立ち向かってきましたが、どうやらこれまでのやり方ではダメだということになりました。すでに国立病院は国立病院機構と云う名になっていますし、国立大学も行政法人という姿にカタチを変えております。医療や教育の分野といえども赤字はいけないよ、という基本的な国の姿勢です。そのことに対しては沢山の言いたいこともあるのですが（教育や医療にまで何でも一律の効率一辺倒主義、経済第一主義を持ち込んでいいのだろうかというのがその趣旨ですが）、それは今回は述べません。とにかく、そういうわけで赤字解消を一番で最大の理由として県立病院の独立採算制がこの 4 月から始まりました。病院から見て悪い点は、経営を第一に考えざるを得ず、場合によっては経営上儲からない診療科（小児科など）や救急医療などの不採算部門についてもその見直しをせざるを得ないことです。公共性からは小児医療、救急医療はぜひとも必要であるし、そのための赤字はやむを得ないと思われまふ。それでも赤字が許されないのなら、その公共性から生じる赤字の分は、働く職員の給料をカットするか、人員を削減することで補わざるを得ません。医療は人と人の触れ合いであり、モノのように効率化ができません。人を減らして本当に良質の医療ができるのだろうか心配になります。公共性の維持が難しくなり場合によっては不採算部門どころか一挙に病院そのものの廃止もありうる、というこれが一番の悪い点でしょうか。一方、良い点といえば、病院が独自に考える余地が増えるということでしょう。たとえば、地域にとって必要とあれば、少々高額の医療器械でも導入することを病院独自で決定できるようになります。もちろん、ふところ具合と相談してのことではありますが。経済面からだけ言うと前述の赤字を抱え込む公共性と同時にそれを補う経済性を発揮せざるを得ないので、儲かる診療科をさらに独自の判断で充実させたり新設することが出来るようになります。ただ、県立 5 病院の中でもっとも条件が悪く、北薩病院の母体ともいえる伊佐地方の人口

を考えると（最低 5 万人の人口がないとある程度の規模の病院運営は困難であると思われます）今後の病院経営の厳しさを実感せざるを得ません。それでも公共性と経済性の両立を目指して進んでいかなければなりません。これまでは、公共性という大儀名文に甘えていた体質があったことも否めません。赤字で何故悪い？という居直りだけでは通用しない時代になったという認識のもとで、原点に戻って何故北薩病院がここにあり、存続しなければならないのかということから考え直したいと思います。それは実に単純なことで、地域の方々が我々を必要としているからだということに尽きます。公の面では全体に医療・福祉の切捨て傾向にあります。民の面から見るといざその時に備えよう！という内容の民間保険会社の頻繁なテレビコマーシャルにみるように、医療費や老後の福祉費も自己責任でまかなえ、という流れが明らかです。そういう中でこそ、地域の公立病院の役割は以前よりまして大きくなるのでありそのためにも健全経営をし、医療の質を高め、地方でも中央に負けないくらいの医療を提供することが我々北薩病院の役割であると考えます。

病気を克服する場所でもあり、またあるいは生涯を終える場所でもある病院。一人ひとりの患者さんにとってここに来て良かった！あるいはご家族の方にとってここで看取ることが出来て良かった、と言っていただけの病院を目指して職員ともども頑張っていきたいと思えます。

県立北薩病院の理念

慈愛・協調・前進

患者憲章

- 1 患者さんには、常に人間としての尊厳を尊重された医療を受ける権利があります。
- 2 患者さんは、どなたも、どのような病気の場合でも、平等かつ公平に必要な医療を受けることができます。
- 3 患者さんは、治療、看護の内容および病状経過について、理解できる言葉で説明を受けることができます。
- 4 患者さんは、十分な説明と情報を受け、納得のうえ自分の意志で医療を選択することができます。

- 5 患者さんの、医療上および個人的な秘密は守られます。
- 6 患者さんには、研究途上にある治療を受ける場合、前もって治療内容について十分な説明が行なわれます。
- 7 患者さんは、お互いの入院生活を守るために、定められた諸規則を守る責任があります。

さつま狂句

きんかん

試験もすん^{かんさま}神様の^{たの}願だどん^{だめ}不合格でした

仕事た無し^の女房世辞^{か け め し ょ}とい飯^{めし}にや骨があつ

年寄りには年寄りの仕事がある

宮園 辰夫

21世紀を迎えてから高齢者のこれからは難しい。60歳で定年を迎えても、65歳までは年金は出ないし、しかも働き人は多さんいる。もちろん生活の為の人もあるけど、お金はそんなにいらないが、働きたいという人がとても多い。ある先生は言う。サラリーマンを止めた人の方が、ボケが早いし、怪我をするとなかなか治らない。それに比べると自営業の人は、ボケも怪我也少ないと云う。年寄りの求人は少ない。ボケたら困るし頭が固くなって協調性も乏しくなっているから、すぐ喧嘩するし、これからの世の中は老人は増えるし、若い人達も高齢者と上手くやっていく方法を見つけて、大いに職場でも働いてもらわないと困るのではないか。平川動物園に三十人程の年寄りの案内係りがいる。交通費程度の支給で働く、つまりボランティアだ。何日か講習を受けて、動物園規定の制服を着て案内する。指導する方は、根気よく年寄りに接したんだらうと思う。みんなはうまく仕事をしているそうで、まだ二、三人しか欠けていないと云う。何時も色んな動物を見られるし、いろんな世代の若い人達にも出会えるし、よく勉強して、最初の講習で受けたのより、もっと高度な知識で入園者に解説出来る様になったとか。毎日動物に接していれば、愛情もわ

くし、よくわかってくるし、それなりの緊張感はあるだろうが、何より気分がリフレッシュされてくる。若い人達の仕事についている期間が短くなっている昨今だから、じっくり腰をおちつけて働いてくれる年寄りの方がいい場合もあるとか。人間は一生のうち、4回動物園に行くそう。先ず子供の頃、親と一緒に行って、次は恋人と行き、ゴリラの檻の前に行く。やがて結婚して子供を連れて行く。最後には老年になってから思い出にひたりに行くらしい。アー、楽しくもあり淋しくもありですね？

短歌

宮園辰夫

一万余の北帰行の鶴 忙しく遠き道程に羽を休め

今が時期何処からとなく匂う沈丁花一人歩めば

俳句

西屋敷喜美子

子無けれど 孫多かりき 風薫る
こでまりや 抱かるる孫の 面映く

花の下 抱きし赤子の重きこと
朧月ふるさとの駅素通りす

目指せミラクル

カラーパーソン

頚椎脊椎管狭窄症により左手の脱力と筋萎縮が明らかとなったカラーパーソンにとって、日々進行する筋力低下は何とも恐ろしいものであった。今は左手だけだけど、右手にきたら完全にアウトやなあ、そうなる前に手術をした方が良いかもなあ、いやいや、ここは慌ててはいかんぞ。早まるな。ちょっとでも右手に不自由を感じてからでも遅くないぞ。手術はいつでも出来る。(なーんていって、本当はただ怖くてびびっているだけではあるのだが)。それまでにやることをやってみよう。考えが朝夕で変わるどころか、1時間おきに変わる有様で混乱を極めていた。

さて混乱した頭のせいでもないであろうが、もっともカラーパーソンが注意を払っていたにもかかわらず、絶対に避けたかった最悪の事態が起こってしまった。とある夜、宴会の帰り道、ほろ酔い加減で暗い夜道を歩いているとき、突然、景色が上下に動き、夜空が眼前に拡がった。ほぼ同時に背中と頭に枯れ草を踏みしだく音とともに衝撃を感じた。無意識に両手を広げて身を守ろうとするが、傾きかけたほろ酔いかげんの体を支えることは到底不可能である。ああ、しまった、いま倒れているぞ！と思う。まずいなあ、これは。頭だと脳挫傷、首だと狭窄症の悪化をきたして、四肢が麻痺するぞ！うーん。どじった。でも仕方ないか。これもそうなる運命なのだろうなあ。救急車で運ばれるのもなんかカッコ悪いなあ。あーあ。とんでもないことになっちまったなあ。

千鳥足のつもりではなかったが、どうやら見事に道路わきの側溝に足を踏み外して転落、転倒したようだった。ほんの瞬間に沢山のことが頭に浮かんだ。ああ、死ぬ前に走馬灯のごとくこれまでの人生が駆け巡るというのは本当なのだなあと思った。

幸いに側溝に水はなく、底は草むらのようになっていたので、ひざや手のひらにすり傷が出来たのと、肩と腰の打撲くらいですんだ。幸運。しかし、その後 2,3 日左上肢の脱力が進んだような気もしたが、まあ、これは気のせいというか、そういう思い込みのせいであったかも知れない。それにしても、とカラーパーソンは思う。意外と人間はつまらないことで人生の大事を迎えたりするものなのかもしれないなあ。志半ばでまったく思いもしないことでそれを中断せざるを得なかった人も沢山いるのだろうな。偶然の交通事故とか、災害とか想定外の病気とか。スーパーマンでも脊損だもんなあ。やっぱり今日一日悔いのないように生きていかなければならないなあ。もう、お酒を飲んだ後は出来るだけ歩いてかえるのはやめて、タクシーにしよう。(まあこの程度の教訓しか得られないのですね。多分、あと 2,3 回は落ちるでしょう)。

予想外の事故ではあったが幸いに大したことなく済んだ。うーん、これは実は自らの強運を示しているのかもしれないぞ、とかなりの外的な教訓を得たカラーパーソンは迷いを吹っ切り、手術をせずに治すというミラクルを目指すこととした。1 日 1 回昼飯前の首吊り(頸椎牽引)であったのを朝昼夕 3 食前の 3 回に増やし、星状神経節へのゼノン照射も併用し(これは交感神経をブロックして上半身の血流を良くするという治療です。肩こり、後頭部痛のひどい方は一度お試しください。10 分で終わります。)さらに内服では血管拡張剤を追加した。おかげで薬は多いときは日に 15 錠を超える。目はかすむわ、手足はむくむわ、顔面は紅潮するわの副作用には知らんぷりを決め込む。

カラーパーソンにとっての希望は、MRI 検査で脊髄の圧迫が症状を説明するに十分なほどはないということだ。これだけ筋力が低下し(顔を両手で満足に洗えない。ネクタイを結ぶのに左手が役に立たない。)、筋肉も萎縮しているにも拘わらず画像では局所の圧迫所見が目立たないのだ。感覚障害がないのもおかしい。また、画像所見に比べて左右差がありすぎる。これらのことを考えたとき、カラーパーソンは思った。そういえば、脳血管障害(脳卒中)を患っている人の中には、とても初期には麻痺が強くて歩行は無理だろうと

思われた人が医者 of 予想に反してスイスイ歩けるようになったりしてるぞ。どうしてこの画像で歩けるのだ！と不思議に思う人も沢山見てきた。どうみても奇跡だよねえ、という人達をみて人間の不思議さ、強さをみてきたではないか。人間における意思の関与の大きさは十分知っている。人知を超えた肉体の回復力は確かにあるのだ。自らに都合の良いものしか見ないことを信条とするカラーパーソンは予想外に回復した人達のみを思い出して、自らも奇跡を起こしたいと強く願うようになった。一度麻痺し、萎縮した左手をなんとか手術しないでもとに戻す。ミラクルカラーパーソンになるのだと。かつては長島茂雄巨人軍監督が起こしたミラクルのように、あるいは近くはWBCで優勝した王ジャパンのように。自力本願でも他力本願でも良い。ミラクルだ。奇跡を起こそう。気力とリハビリと内服と酔っても転倒しない歩き方の修練。飲んでも倒れないようにすべきか、倒れるまで飲まないようにすべきかという解決困難な疑問は残したままカラーパーソンは奇跡への道を歩み始めた。現在、ほんのわずかであるが奇跡の萌芽は・・・。

早口言葉

生麦生米生卵

赤巻紙青巻紙黄巻紙

京の生鱈奈良生まな鯉

竹屋にたけ高い竹立てかけた

特許許可する東京特許許可局

坊主が屏風に上手に坊主の絵をかいた

編集後記

超高齢化社会。また今回も世界一の長寿国でした。本当に元気なお年寄りが増えていきます。90歳近くでも矍鑠（かくしゃく）されている方を見ると、とても勇気づけられます。おれもあと40年は生きれるかも、と。21世紀半ばの世界を目にすることができるかもしれません。ちょっと変だけど、死ぬまでは元気でいましょう、というのが良いですね。親が元気で長生きすると子供はありがたいものです。みなさん、もっと老人力を発揮しましょう。

発行所：県立北薩病院さざんか編集局

編集責任者：高橋 浩一